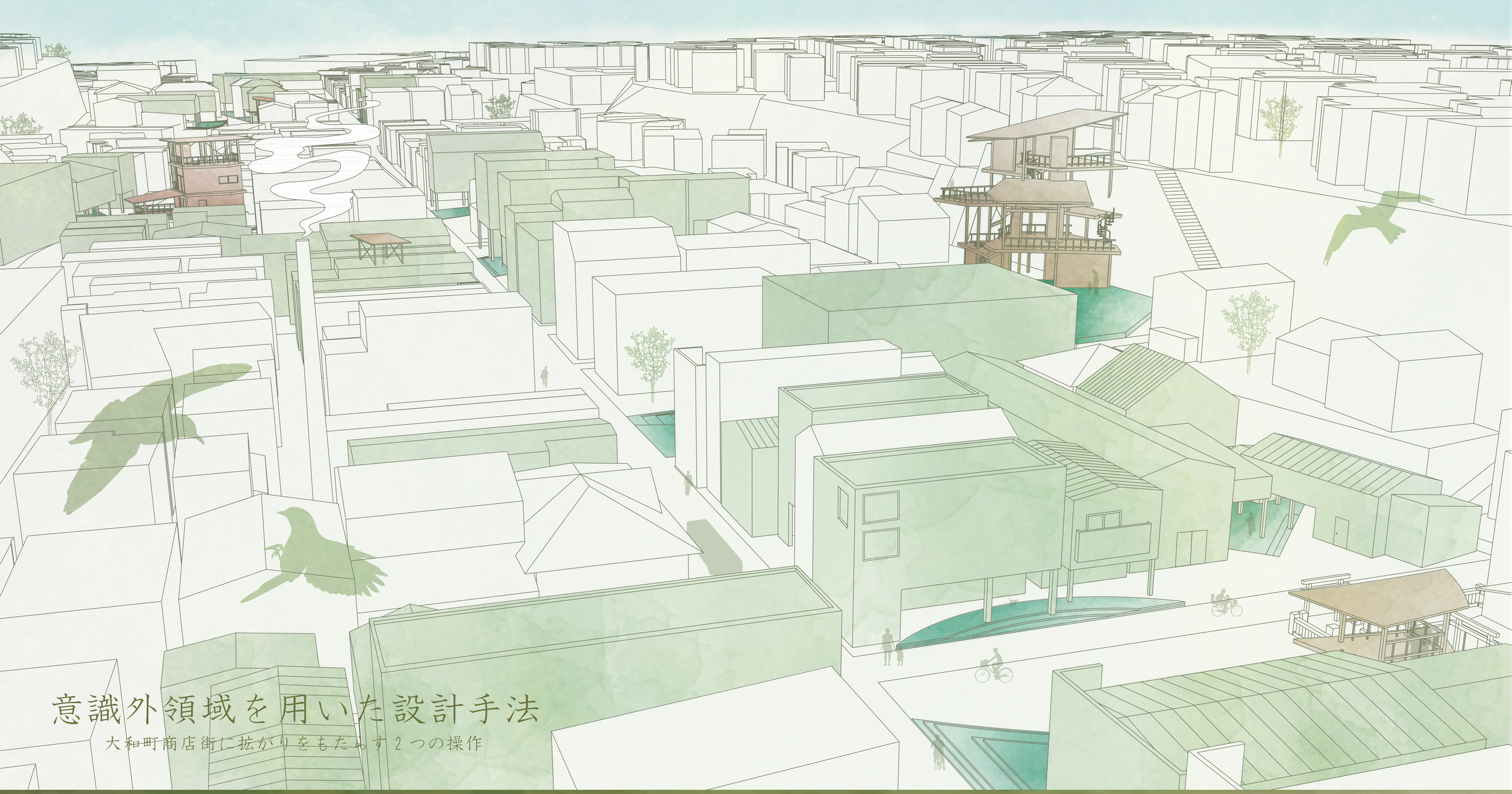
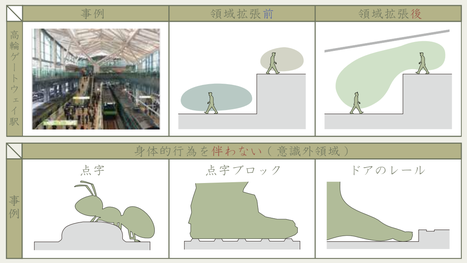


意識外領域を用いた設計手法

大和町商店街に拡がりをもたらす２つの操作

設計概要

1. 背景と目的



外的な要因の介入により空間認識の幅が変化する領域の拡張性に着目した。身体的行為を伴わない「意識外領域」は空間を拡張するという点で可能性があり、手法への応用を目的とする。

2. 建築空間における意識外領域の事例

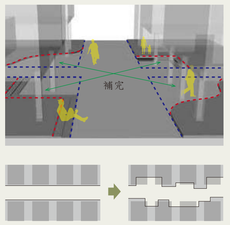
■三崎

■大山

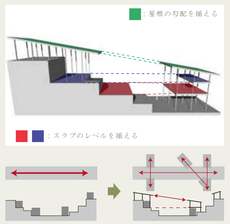
設計課題における意識外領域を用いた設計手法を分析し、空間に及ぼす効果を推考する。結果として崩す・整えるという操作で領域の拡張に成功していることがわかった。

3. 意識外領域を用いた空間モデル

■「崩す」手法



■「整える」手法



事例を基に簡易的な空間モデルを作製し、分析・検証を行う。崩す操作は既存の街区内に境界が入り込むことにより、整える操作では勾配等の要素を揃えることにより領域が拡張される。

4. 空間への応用

敷地は横浜市中区の大和町商店街である。一般的な近隣型商店街であるが、元は射撃訓練場であるという歴史があり強い軸性が残る。またアクセシビリティが悪いため流動性を高める機能を挿入する。

5. 設計による効果

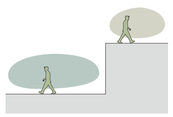
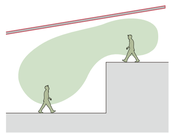
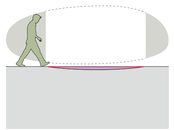
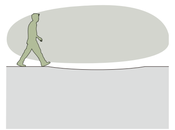
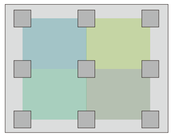
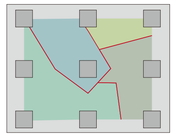
崩す・整えるの操作によって、軸性が強く拡がりを持たなかった大和町商店街が緩やかに拡がる。また平面操作（マクロ）と断面操作（ミクロ）によって町に統一感が生まれる。

1. 背景と目的

■問題意識

起伏が激しく、狭長な街区を持つ都市近郊は、拡がりを持たず個の活動で収束する限定的な空間となっている。そのような土地で、全体性を有する町単位での豊かな空間体験は可能なのだろうか。

■日常空間における領域の拡張性と認識外領域

	事例	領域拡張前	領域拡張後
大屋根			
水			
タイル			

日常空間において、ある外的要因が介入することで空間の認識に変化が起こる「領域の拡張性」に着目した。身体寸法から大きく逸脱したスケールでの切り替わる領域を「認識外領域」と定義し実際の空間に応用することで拡がりのある町を実現する。

2. 模型による認識外領域の検証

■道の拡張

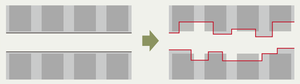
広小路の街区を拡張し道を面的に捉え活動を生む提案。既存の街区線に対し拠点性を増す円形や曲線の地面を設計する。整っていた街区線を崩すことにより認識外であった街区内へ領域が拡がる。

■視線やスラブの統一

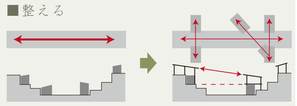
傾斜地で線的な町に対し、屋根勾配・スラブ・平面的な角度を統一することで町全対が関連する領域であることを認識する。元々ばらついていた町をそれらの要素により整え、拡がりをもたらす。

3. 認識外領域を顕在化する設計手法

■崩す



■整える

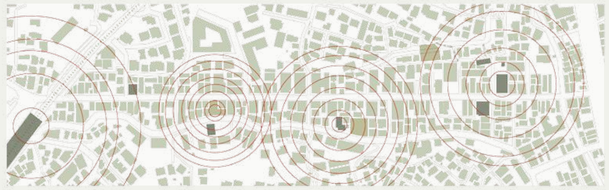


自身の設計である上記２つの事例を分析すると認識外領域を顕在化するために、整っていたものを「崩す」・崩れていたものを「整える」という２つの手法が有効であることがわかった。

5. 町に統一感を与える設計手法

■都市スケールの平面操作

1. 求心性のある円形グリッド

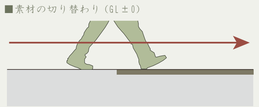


2. 拠点間を繋ぐ円形グリッド

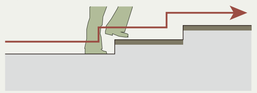
3. 方向性を持つ直線グリッド

■身体スケールの断面操作

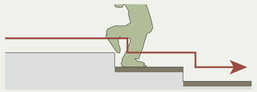
■素材の切り替わり（GL±0）



■素材の切り替わり＋上げ（GL+250～500㎜）

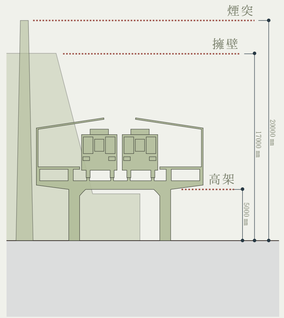


■素材の切り替わり＋下げ（GL-250～500㎜）



断面操作では階段など身体寸法に極めて近いスケールの段差であるため、違和感なく町に溶け込む。

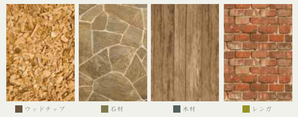
■マクロな断面操作



町のレベルを継承する。認識しなかった電車や擁壁が視線に入り、潜在的なつながりを認識する。

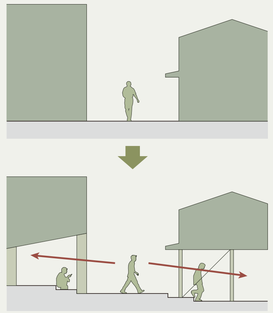
■マテリアルによる領域の顕在化

■マテリアル一覧



地面は、各々の領域でマテリアルが異なるため視覚的に領域の切り替わりがわかる。

■領域を拡げる立面操作



既存の建物を減築する。空き店舗が増えた商店街の一階を削ることで町が面的に拡がる。

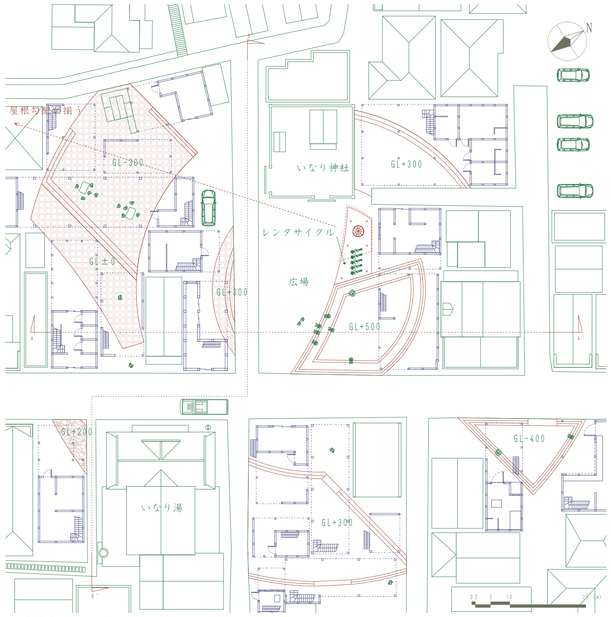
4. 敷地選定：大和町商店街（神奈川県横浜市中区）

■商店街に寄り添う機能

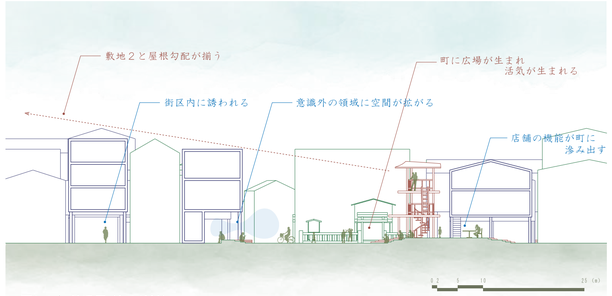
1. 交通機能

2. イベントスペース

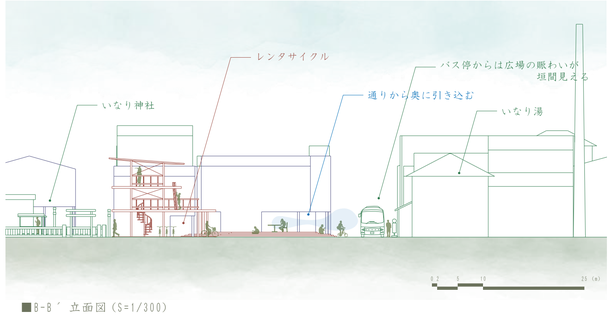
SITE1



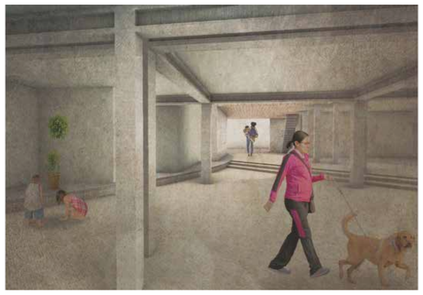
■平面図（S=1/400）

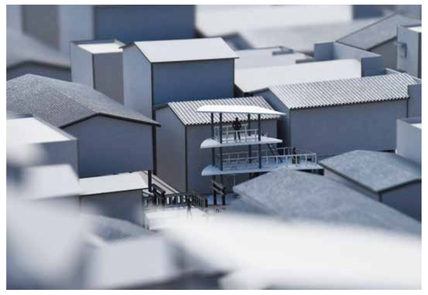


■A-A´ 断面図（S=1/300）

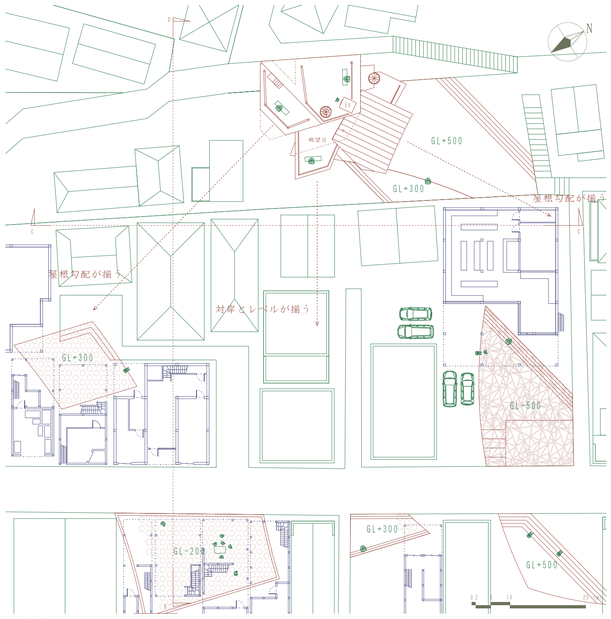


■B-B´ 立面図（S=1/300）

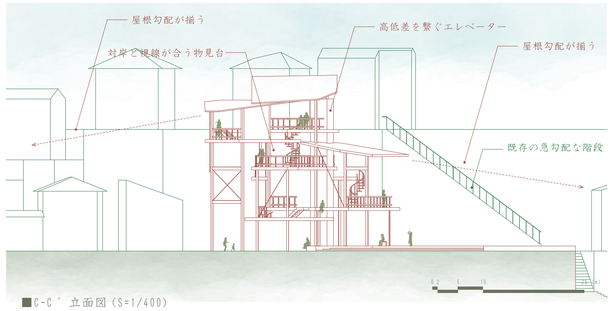




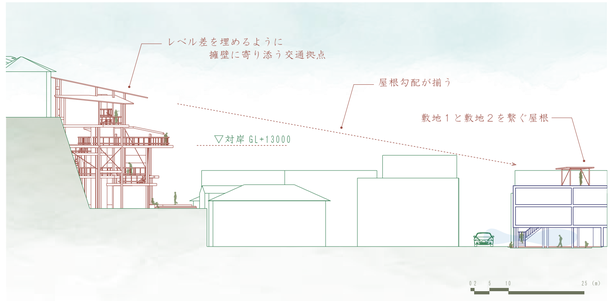
SITE2



■平面図（S=1/400）



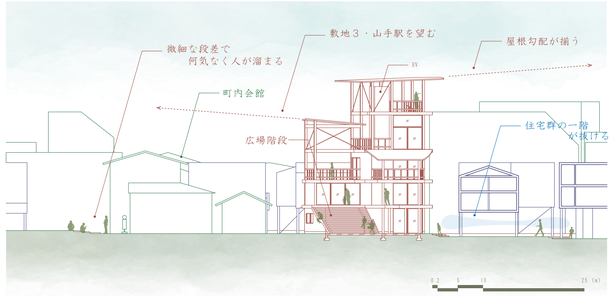
■C-C´ 立面図（S=1/400）



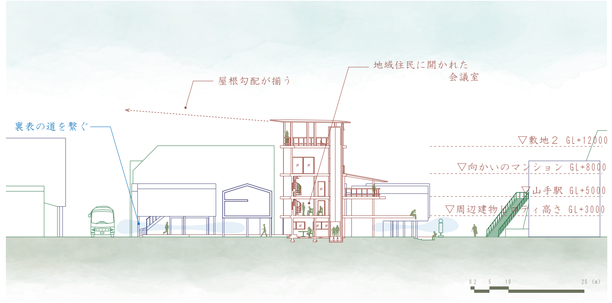
■D-D´ 断面図（S=1/400）

SITE3

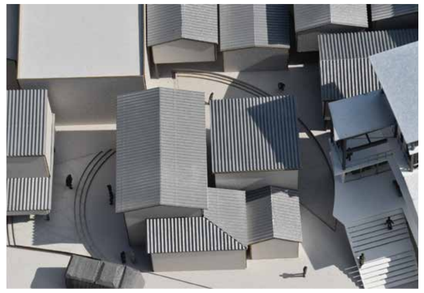
■平面図（S=1/400）



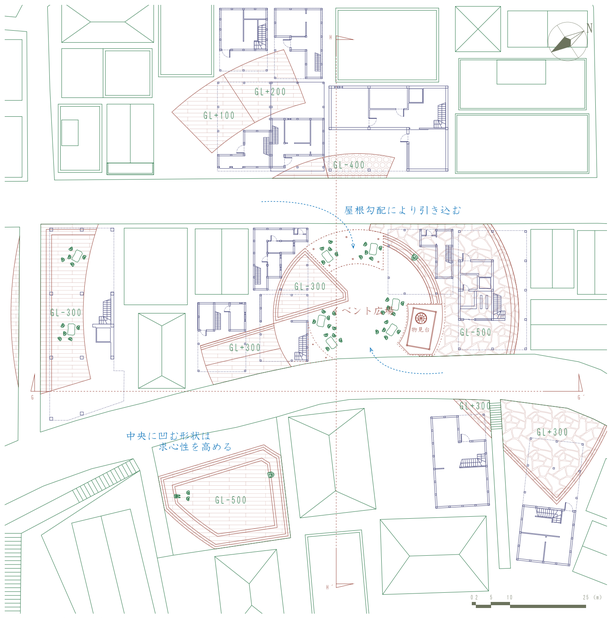
■E-E´ 断面図（S=1/300）



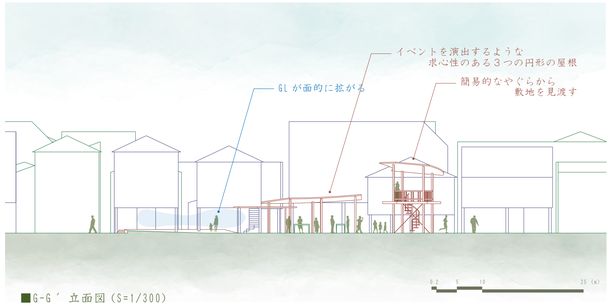
■F-F´ 断面図（S=1/400）



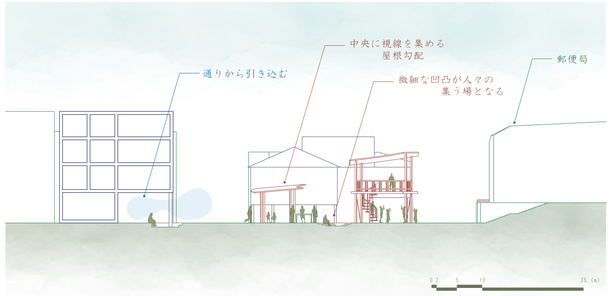
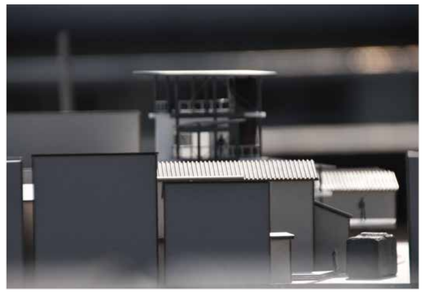
SITE4



■平面図（S=1/400）



■G-G´ 立面図（S=1/300）



■H-H´ 断面図（S=1/300）